

ウッディチキン／関西例会

『例会レポート 160』

日 程	2022 年 2 月 9 日(水)
会 場	1部 一燈園 2部 ミルボン京都スタジオ
参加者数	1部 約 38 名 内県外 23 名 / 2部 約 41 名 内県外 22 名
講演会内容	第 1 部 一燈園見学 13 時 西田当番氏 講演 15 時 山崎 宣次氏 講演 第 2 部 ミルボン京都スタジオ 19 時 相 大二郎氏 講演
親睦会	開催なし



ウッディキチン事務局

文章・写真提供／向井 健介

<http://woodychicken.com> info@woodychicken.com

天気は良かったですが、気温が低くきりつとした空気の一燈園に全国からの仲間が集まりました。

一燈園代表の西田当番氏から貴重なお話をいただき、胸が熱くなりました。

第一部

13:00～ 一燈園代表 西田当番氏講演

13:40～ 一燈園見学 学校・礼堂・帖半寮・道場など

14:40～ 礼堂にて、瞑想体験 相大二郎氏

15:10～ 山崎宣次先生講演

16:10～ 資料館見学

一燈園当番 西田多戈止(たかし)氏講演

昭和5年生まれ、本名武(たけし)。多戈止の号は、一燈園を継承した際に「武とは本来、戈(ほこ)を止める(和平)の意であるから、一燈園の当番として多戈止を用いるように」と、天香サンから贈られたもの。



○一燈園とは

一燈園は、1904（明治 37）年、西田天香(以下、天香さん)によって創始されたもので、自然にかなった生活をすれば、人は何物をも 所有しないでも、また働きを金に換えないでも、許されて生かされるという信条のもとに、つねに懺悔の心をもって、無所有奉仕の生活を行って いるところです。

「一燈園」の名は、天香さんと親交があり、その最初期において一燈園生活の可能性を看破した宗教思想家、綱島梁川氏(1873～ 1907 年)の著書に因むものです。

今一燈園では、京都市山科の一角で(京都市山科区四ノ宮柳 山町)、天香さんに触れた人達を中心に自然にひとつの家庭のような 共同体を形成し天香さんの示された奉仕(托鉢)の生活をしています。お光り(大自然、神、仏の意)に捧げられた土地を預かり、それぞれに托された仕事に励んでいます。その働きは、財団法人懺悔奉仕 光泉林(現、一般財団法人懺悔奉仕光泉林)および、出版・印刷・農業・建築・劇団の諸事業部、学校法人組織として形づくられ、メンバーのそれぞれがこれらの部門に托鉢する(子供達は勉強することが托鉢)ことを通して奉仕に生きる喜びを体得し、経済の扱い方が正しくあるように(お光りより預からせて頂く)試み、実践しています。

さらに平和の願行として六万行願というお便所掃除の奉仕を約一世紀にわたって続けることにより、懺悔と下坐からの建て直しを祈っています。願行に深淺の差はありましようが、老若すべてが懺悔報恩の心を持って捧げた働きをし、それぞれの能力に応じて働き、必要に応じて恵まれる自然にかなった生活の成就を念願しているのです。

○西田天香さんとは？

天香さんは、1872（明治5）年、滋賀県長浜の商家に生まれました。二十歳にして長浜地方の小作百姓農家を率いて北海道に渡り、500ヘクタールの土地の開拓事業に従事。その将来は事業家としても大いに嘱望されましたが、開拓事業をすすめる中で起こった資本主（出資者）と現地耕作者との間に生じた利害の対立、争いに直面して、天香さんは大いに苦悩し、開拓事業そのものを他人に委ね、人間としての争いのない生き方を求めて求道の日々を重ねたのでした。そして、とうとう「争いの因となるものは食べまい」と決意し、三日三晩の断食籠坐の果て、赤ん坊の泣き声を耳にして大靈覺、そこに争わずとも恵まれる食があること、生命の原点を見出し、世にいわゆる「一燈園生活」を創めたのでした。それは、無一物・路頭を原点としての懺悔・下坐の奉仕、許されて生きる「托鉢」の生活でした。その事実によって1921（大正10）年、『懺悔の生活』が出版されるや、天香さんと一燈園の名は一挙に世に知れるにいたり、多くの人が道を求めて天香さんのもとに集まるようになります。倉田百三、尾崎放哉といった当時を代表する文化人も一燈園生活を送ったことC知られています。1929（昭和4）年には、京都の山科ビ財団法人として認可された財団法人懺悔奉仕光泉林（現、一般財団法人懺悔奉仕光泉林）を創設しました。戦後は1947（昭和22）年の参議院選で当選。一燈園生活者にさまざまな導きを残し、昭和43（1968）年2月29日、96歳をもって帰光（逝去）しました。

○一燈園生活の根本

「自然にかなった生活をすれば、人は何物をも所有しないでも、また働きを金に換えないでも、許されて生かされる。そしてそこから世の争いの種が除かれ、平和な社会がもたらされる」。1904（明治37）年、赤子の泣き声を機縁に、天香さんは、一燈園生活を創められました。天香さんの一燈園生活と、そこに込められた願いは、1921（大正10）年の『懺悔の生活』に具体的に語られ、多くの賛同者・協力者を集めてゆきました。この大きな流れは、天香さんを参議院議員、名誉市民（長浜市）となし、一燈園にアルベルト・シュバイツァー賞（贈IARF 国際自由宗教連盟）をもたらし、現在も多くの人を教え導くものとなっています。

【生かされている生命-許されて生きる】

西田天香さんは、「生命は授かりものであり、生きようとしなくても生かされており、生かされているから感謝して働かせてもらうのだ、そのために必要な食は求めなくても与えられるのだ」とする生命観・人生観に立った無所有奉仕の生活をはじめられました。天香さんの生命観・人生観は、生きるためには他の生存を脅かしてよい、奪ってもよいとする生命観・人生観とは根本的に土俵を異にするものです。一燈園は、天香さんが開拓された生命観・人生観のままに生活を送るとする人たちの集まりです。

【一燈園生活における托鉢と食】

人が奪い合うのは執着からだ一燈園は考えます。財産や地位や名声への執着は争いの種でもあるのです。これに対して、見返りを求めず、無執着の気持から世に働きかけるとき、人は奪い合いから無縁だといえるでしょう。無執着の気持ちからお互いに与えあうことを理想として、一燈園ではまず自分から他に捧げることを行います。これが一燈園の托鉢（たくはつ）です。一燈園生活は、托鉢に捧げられた喜捨によって生かされる生活です。

【懺悔・下坐の生活-わびあい・拝みあい】

「ありがとう」と心から言うとき、私たちは自分を誇る気持から離れています。「ごめんなさい」と心から言うとき、私たちは人をねたむ気持から離れています。ありがとう、ごめんなさい、が素直に口から出てくるように、一燈園では、つねに他より下に自らを置き、悩める人、弱い人の立場で生活することを実践しています。これを懺悔・下坐の生活と呼んでいます。

【一燈園生活の願い-皆俱成就大円覺・将来世界真平和】

一燈園生活の究極の目標は、戦争がないということだけでなく、あらゆる対立、憎悪、怨恨、争いを生み出すものを根切れさせ、種をつくり出さない、本当の心の平和ということにあります。皆俱成就大円覚・将来世界真平和一地球上の人間がすべて本当に自覚した人間となり、世界に真の平和がもたらされる―無限のかなたにある道標かもしれません。しかし、私たちはこれをずっと祈り続けています。

【「宣光社」―預かった財物を争いのない平和な世界のために運用経営する機能】

一燈園生活の基礎は、見返りを求めず、懺悔奉仕の気持から世に働きかける托鉢生活にあります。托鉢生活を複数人から協働で行う場合、争いのない人間関係を築き、喜捨された財物を正しく預り、運用経営することが求められます。一燈園生活のこうした実践機能を宣光社(せんこうしゃ)と呼んでいます。京都・山科の地にある一般財団法人懺悔奉仕光泉林も、財を正しく預かり運用しようとする宣光社の一つです。

○一燈園の学校燈影学園について

学校法人 燈影学園は、“争いのない生活”を標榜し、ミリオンセラー『懺悔の生活』を通して多くの人々に影響を与えた実践的思想家・西田天香によって昭和8年(1933)に発願設立されました。

「教育の仕方にも、枝葉のひを不自然なやり方で教える教え方と、根本のことを自然な方法で教える教え方の二通りあるようです。(中略)『学校に行ってみてまごついた習い方をすると、枝葉のことは覚えるか知らぬが、根本のことを失う恐れがある。それよりは、むしろ学校に行かぬ方がよいと思う』と言いたいのであります。殊にこの頃の学校教育は、どれだけ覚えましても、一番大切な人格は墜落させることがどうやら多いらしく、『学校に子供をやることはむしろ損じや』と思わすほどで、そうしてこの考えはそんなに間違った考えではないと思うのであります。(中略)本来の魂を失わないよう、世間の枝葉の学問に誘惑されないよう、それらを知ることは差し支えないし、粗末にしてはならぬが、ただ、それに執われないようにしていただきたいと思います。(西田天香『思ひ出』(昭和10年)より)

これは今から80年前の学校創設者西田天香の言葉です。以来、燈影学園は、“根本のことを自然な方法で教える”教育方針の下に実践しつづけてきました。緑豊かな山麓に佇むこの学校には、人を蹴落したり、いじめる生徒はひとりもいません。1クラス10名前後の小中高一貫教育により、子供たち一人ひとりの1個性はのびのびと大きく育っていきます。

本学の教育は単なる知識修得に偏ることなく、「行餘学文」(行じて餘暇あれば文を学ぶ)の校是のもとに、個々の生徒の人間性を高めること、すなわち“天性教育”に重点を置いています。その柱となっているのは「祈り=自己を深める」、「汗=社会に役立つ」、そして「学習=基礎学力の徹底と定着」です。

【一燈園小学校の特徴】

1. 少人数によるきめの細かい教育を行い、基礎学力の充実をはかります。
2. 毎朝の朝課、食堂での食作法などを通して礼儀・作法を身につけます。
3. 集中力の向上と右脳の活性化をはかるため、そろばん教育を行います。
4. リトミック、日本舞踊、剣道など、伝統的、総合的な授業を実施しています。
5. 器楽、リトミック、日本舞踊、珠算、英会話については専門の先生により指導を行います。
6. 併設の中学生・高校生との交流が活発なため、縦の人間関係が形成できます。
7. 他校にまねのできない本字独自の行事(奉仕活動、一輪車大会など)、小学校から中学・高校まで合同で行う行事(運動会、秋の学習発表会、春の学習発表会)を実施しています。
8. 動植物の採集など、自然豊かな本学の環境を活かした教育にも力を注いでいます。

見学&瞑想体験



山崎宣次氏 講演

昭和 18 年、一燈園で生まれる。鈴木清一氏が創業した株式会社ダスキンに入社、掃除用品のレンタルシステムやミスタードーナツ事業などの同社マーケティングやシステムの基盤を作る。平成 2 年にベルウェイ研究所設立。小売・サービス業の CS(顧客満足)、マーケティングを専門に事業システム開発やコンサルティング、講演活動などに幅広く活躍。

1. 物の集まらざるは恥なり、集めて己のものとするも恥じなり (托鉢の精神)

- 1943(昭和18年)8月、満鉄に招かれた天香さんのお供で約50日間、朝鮮半島から中国東北部(旧満州)へ随行させていただきました。その時、祈りの経営の極意を教えてくださいました。(鈴木清一32歳)
- お招きいただいた方の行くところ行くところ、出された甘いお菓子などを、残さず食べようとした鈴木清一をたしなめられた。そのあとの種明かしの教えです。
 - ・「物集まらざるは恥なり。また集めたる物を己のものとするも恥じなり」さらに
 - ・「普通の人は、物を与えることで人を救う。しかし道を極めた透徹せる者は受けることによって人を救う」
 - ・ 祈りが深まれば物は自然に集まり、その集まったものによって人々に役立てるといふことなのです。
 - ・ 真剣にお役に立つことだけ考え托鉢していれば、必要なものは与えられる
 - ・ 捧げられたものを、自分のものとせず、より多くの人のお役に立つように生かせるかが大きな宿題である。
 - ・ この言葉に鈴木清一は衝撃を受けたと記しています。
- 商いの目的は、真剣に喜びのタネをまくこと。そしてご縁を深め、人々を幸せにすること。

2. 利益を忘れた仕事の中に、本当の仕事の喜びがある。

- 仕事そのものに本来喜びがあります。
 - ・ 人に喜んでもらえる喜び
 - ・ 自分が成長できる喜び (創造性、潜在能力の開発、知識・技術の獲得)
 - ・ 働くことは、本来生きる喜びであり、生きなのです。
- 仕事ではなく、金銭など、他の自己利益を目的のための仕事は、仕事そのものの喜びが得られなくなります。

3. 常に、下座に大切する

- 常に下座を行ずること
 - ・ 人の上にならないで下に居ること。仕事でも、下の仕事をさせてもらうこと。
 - ・ とかく人は上を望んで、下をいやしめるものです。その下の事を喜んでやらせてもらう。根本を下座に据えるとき、どんなに高いことを預けられても揺るがないものです。(天香さん)
- 下座はかえって上座であり、一切を成就することができる最高の場所である
 - ・ 下座は、己の生活を救い、おまけに人を助ける力となる。
 - ・ 人は下座にいる時、素晴らしい人格が現れる
- 下座とは、必ずしも低い場所を指すのではなく、その立場に執着せぬことである。
- 下座は、極度の謙遜の姿である。
- 経営者こそ、下座の精神が一番大切なのではないのでしょうか？

4. 会社も含めて、すべてが預かり物

- ・ 無所有とは、すべてが自分のものでなく、「社会（おおいなるもの）からの預かり物」とする考え方です。
- ・ 宇宙の根本原理から考えると、この身も含めて、すべての者が大いなるものからの預かりもの
- ・ 財産、地位、名誉・・・自分のものと固執するところから、妬み、恨み、争いの心がおきる。
 - ・ ものが欲しいと考えてもよい。しかし、次の瞬間忘れてもよい。
 - ・ お金を持ってもよい。しかし、それは大いなるものからの預かり物と考え、固執しないことである。
- ・ 会社の名誉や地位も一時の預かり物。
 - ・ 仕事はすべて当番（たまたまの役割）です。
 - ・ 経営者は引き際が大切だと言われますが、名誉や地位に固執するところから、引き際を誤ってしまう。

5. わびあい、拝み合いの会社

- ・ 人と人との関係の中で、争いや、妬み恨みのタネは、互いに相手を尊重せず、自分の正当性に固執することです。
- ・ 一灯園では、「人は、わびあい、拝み合い」と子供のころから教えられます。
 - ① わびあいとは
 - ・ まず、自分から先に「ごめんなさい」あるいは「至りませんでした」と詫言すること。どんなときにも、必ず自分が反省すべきことがあるものです。
 - ② 拝み合い
 - ・ 拝むとは、相手を敬うこと、感謝すること、許しを請うこと。
 - ・ 相手の心の寄り添うこと。
 - ・ 相手を人の幸せを願うこと。
 - ・ 仏像は、いつも私たちを拝んでくれている。
- ・ この教えは、ダスキン悲願の「謙遜」という言葉につながるものです。

6. 最終的に人間の生きがいとは、 「人の成長を手助けすること」

- ・ よりよく生きるということは、自分なりの潜在的資質を開花させながら、人々に貢献することだと思います。
- ・ その基盤となるのが、「自分を二の次にして、人の成長を助ける」喜びを知ること
- ・ 天香さんの懺悔、感謝、奉仕の生活は、自分をできるだけ下に置き、人のために尽くすことによって、相手も救い、自分も救われるのだということではないでしょうか？

7. 人生の目的とは人を喜ばせることにある。

- ・ 惜しみなく愛を捧げよう。
 - ・ 人を愛し、喜ばせることが生きがいなのです。
- ・ たとえ自分にとって損であろうとも、まず相手に喜びのタネをまこう！
 - ・ 喜びの種まきは、自分も相手も幸せにします。が本当の幸せを掴むために、周りの人に日々、喜びのタネをまこう！
 - ・ 喜びの種まきのできる人が、結果として幸せを掴む人です。
- ・ 金光教の教え「あいよかけよ！」 キリスト教「隣人愛」の精神は、神の意志はみんなが幸せになるように、神様とともに周りの人の幸せを手助けすること。

8. 感謝のできる人になろう

- ・ 鈴木清一は、20歳の時に肋膜炎を患い、医者に見放されていたのですが、真剣な祈りによって奇跡的に回復したと言っています。
 - ・ その時覚醒したことは
 - ・ 自分が今生きているのは、自分ひとりの力ではない。
 - ・ 多くの人の祈り、さらに大いなるものの働き（愛）によって生かされている。
 - ・ 生かされている命を有意義に使うのが生きる意味ではないか？
 - ・ 生かされていることに気付いたら、生かされていることに感謝し、大いなるものの意思に倣って、人の幸せのために生きるのが生きる目的ではないかと考えました。
- ・ 天香さんの教えの根源には、大自然に生かされている喜びがあります。
- ・ どんな暮らしの中にあっても、生かされていることに感謝し、日々の暮らしに感謝しながら生きることが、本当の幸せではないか？

9. 諸宗の真髓を礼拝する

- ・ 宗教と実生活とが離れていないのが本来なので、これが二つに離れ出して両方とも妙な片輪になったのであると思う。
 - ・ 日々が信心なり（鈴木清一）
- ・ 真髓のない宗教はない。だからして真髓だけを礼拝すれば、諸宗は一つである。
 - ・ 礼拝も形式であってはならぬ。すれば殿堂と教会から一度は離れて、宗祖開山達の路頭の生活までゆく必要がある。
 - ・ 衆生救済の大願は一つに帰す筈であるから、救わる人、時、処によりて、種々の方便と現われても、総じて一つであるべきである。
 - ・ 過去の宗祖開山達の捨身から出た影響を受けている我等は、形式的でなく、その真髓に触れて、感謝し参拝せねばならぬ。
 - ・ （真髓ではなく、枝葉の形に囚われすぎるところから、宗教も争いを起こしてしまうのでないだろうか）・・・山崎（注）

第2部 ミルボン京都スタジオ

19:00～

相 大二郎氏講演

一燈園・元燈園学園学園長。昭和11年(1936年)京都に生まれる。昭和47年(1972年)慶応義塾大学文学部(哲学科)卒。幼少から「一燈園」創始者西田天香師に導かれ、「個人の成就」と「世界真平和」について、その「祈り」と「実践道」を教導される。現在携わっている教育現場をはじめ、国際理解教育、ユネスコ運動、ボランティア学習、IARF(国際自由宗教連盟)などの諸活動は、いずれも師・西田天香の精神とその実践道を受け継ぐ。

私は、一燈園に生まれて10か月で父親を亡くしているので父の記憶がありません
ですので天香さんのことを父親と思っています。実は名前も天香さんがつけてくれました
非常に厳しい方でした。

校長を務めていた時に、今から10年前だと思います。
1年生のひぐちあまねちゃんからこんな質問の手紙をもらいました。

だいじろうさんへ

いのちのところと

どこがちがうんですか

おしえてください 1ねん ひぐち あまねより

毎朝、15分ほど職員と生徒たちが一同にそろって瞑想をしています。板の間を挟んで、明かりを落として・・・

物事には答えのある課題と答えのない課題があります。

教室では、九九や文字の読み方やボールのけり方や楽器の弾き方など答えのある課題なので先生たちは教えることができます。しかし、答えのない課題がある。なぜ男に生まれたのか女に生まれたのかこの容姿で、この能力でこの家庭でこの国でこの時代で・・・こたえはありません。答えがないということは、無数にあるということなんです。

一燈園に年頭行願という行事があります。

数名に分かれて、一軒一軒を回り掃除をさせていただく行です。

高校生の感想文を紹介させていただきます。

「今日は8件目の家で、ようやくどうぞと言われてバケツに水をもらい掃除をさせてもらいました。冷たい水でしたがぞうきんを絞って扉から拭き始めました。汚れがひどいので何度もぞうきんをゆすいでいるうちにバケツの水も汚れてきました。そばで見ていた家のご主人が水を変えてこよと言って水を変えてくださいました。ゆすぐとすると、水の代わりにお湯が入れてありました。バケツの中に手を突っ込んでいると手にしみこんでくるお湯の温かさがご主人の心の温かさのような気がしてとてもうれしく思いました。」

手にしみこんでるお湯の温かさが心だと感じたんです。やはりこころは教えることはできません。
子供たちにこころやいのちが大事だということを、言葉を使って教えることはできません。

教育には3種類あります。

教わる

伝わる

気づく

教育は教わることだと思っている人が多いように思います。

一燈園では、伝わる教育と気づく教育を大事にしています。

啐啄同時(そったくどうじ)という言葉があります。

啐 そつ 卵の中のヒヨコが殻の中から早く出たいからつつく

啄 たく 卵の外から親鳥が早く出ておいでとつつく

こういう伝わる教育が大事だと思います。

天香さんに教育とは一言でいうと何ですか？と聞いたときに

「自然にかなう」とおっしゃった

環境 = 山 川 草 木 緑 海 宇宙

現象 = 諸行無常 生老病死 生成発展 変化現象

摂理 = 松は緑 椿は紅 男女 この家に(国→時代→容姿→能力等)に生まれたこと

脳 = 教わる教育 = 知識・記憶 = 学ぶ IT = 情報技術

体 = 伝わる教育 = 実践・技術 = 汗 IP = 情報実践

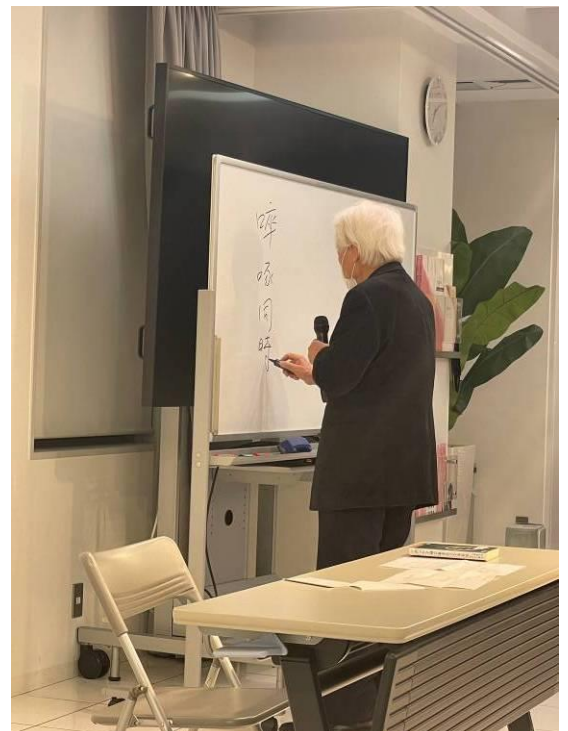
心 = 気づく教育 = 人間性・価値観 = 祈 IS = 情報感性

この3つをバランスよく鍛えることが大切

瞑想 = 答えのない課題 考えても答えがないが、考える(無数の答えがある)

黙食 = 自己との対話 食材の対話から自己と語る

拝育 = 守時 清場 終礼 どの子も親から光をもらっている



以上です。ウッディ事務局 向井健介